

針金ショート物語

針金のようにピンピンに硬い6フィート半のショートロッド・・・
記憶が正しければ、物は試しにと購入したグラスのセット物を除くと、私が2番目に購入したフライロッドで、今現在所有するロッドの中では最古参である。

しかも、このロッドとは・・・出逢いも滑稽で忘れられない。
その後、多くのロッドを潰した私の煩雑な扱いをもうともせず、何度も数奇な運命を潜り抜けて来た不思議なロッドでもある。

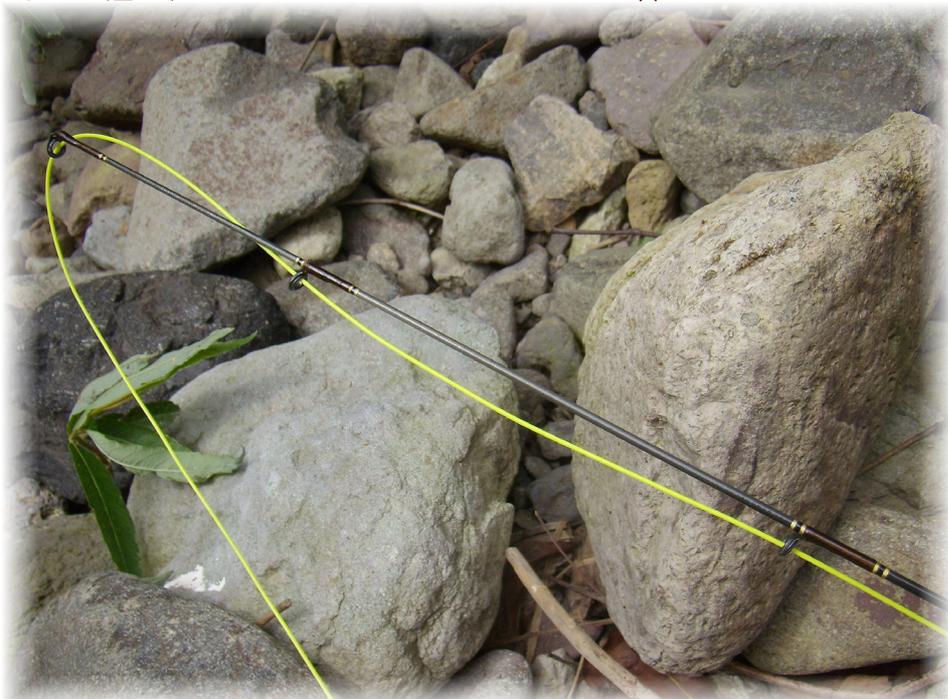
◆ふとしたことから衝動買い◆

フライを始めて間もない頃、グラスロッドのセット物では満足できずに80₀ギのカーボンロッドを購入した直後、今は無き量販店に頼んでおいたルアーを取りに行った際、店先に・・・

【セール・ルアーロッド&リールセット・¥5,000】の張り紙があり、クローズドフェースリールが取付けられたコルクグリップの変な竿が置いてあった。

・・・これがこのロッドとの出逢いである。
今ではまず考えられないが・・・当時、量販店ではルアーの知識も店員を選び、フライとなれば殆ど熟知している方はおられず、この様な事がシバシバ見受けられたのも事実である。

そして、店員さんに・・・



「これ？ほんまにルアー？
フライロッドちゃうん？」

・・・と確かめた。

・・・と言うのもこのロッドは、グリップはどう見てもフライロッドだが、ガイドがフライロッド特有のスネークガイドではなく、すべてリングガイドだった。

それも一時期流行したシングルフットのガイドではなく、ルアーロッドのガイドそのもので、ここだけ見ればベイトキャストロッドに見えたからである。

「どちらでも行けますよ！
ギヤはウルトラライトからライトと読み替えても行けますよ・・・リールはクローズドフェースになりますが・・・

フライなら3-4万ですね・・・」
・・・とこれまたいい加減な事をぬかし上がったが、当時の私も駆け出しで半信半疑ながら信じてしかなく、言われたままに便利なロッドと思いついでしまった。

「そろそろわー!」・・・と、5千円で購入・・・
斯くして、それからロイツへの長い付き合いが始まった。

◆ルアーロッドとジブユーター◆

恥を忍んで書くが、愚かな私は店員さんが言われたことを鵜呑みにして売られていた時の【そのまんま、ルアーロッド】としてジブユーターを買った。

従って、このロッドの記念すべき一匹目は、フライでもシンフでもなく、いやフライではなくスピナーのドロップペンである。しかし、いくらクロスドフエースリールを用いても片手だけでは投げられなかった。

「やっぱりこれ・・・どう考えてもフライロッドやろー」
それ以来フライロッドとして扱われる様になるが、このシリーズのちや#6ロッド(すべてリンクガイド)を店で見つけるまでは確信が得られなかったのも事実である。

◆アテにされないサブロッドとされた低迷期◆

漸くフライロッドとして認知されたものの、当時のメインはその後の選抜戦で数ある候補を出し抜いて転がり込んだ後輩の8.0.0.#4、その次の出番は先輩の8.0.0.#5、このロッドは主役の座を奪い合う選抜戦に参加することもなく隅でくすぶっていた。

あるとき、このロッドが一番飛ぶのかを確かめたくなくて、3本並べて飛ばしてみた。

当然予想は①8.0.0.#4、少し届かず②8.0.0.#4、各段に差が出て6.9.9.のロイツだと思っていた・・・しかし、結果は予想外で順位は全く逆だった。今なら予想的中だろうが、当時はこのショートロッドが圧勝だった。

何のことはない・・・このロッドは剛鉄針金の如く超ファーストアクションで短い為、フォームが安定しない初心者でもタイミングが取り易く、



元から飛ばないと思っっている分、力まなかったただけである。

しかし、こんなメカニズムを知る由もなし・・・自分の腕を楯に上げて「このシリーズは飛ぶ！」と早合点し、その後血眼になってこのシリーズを探しまわり、片っ端から購入することになる。

◆枝谷で使い方が見出された開花期◆

やがて魚が釣れる様になると、魚影を求めて枝谷や源流域を詰める様になる。

すると木々が垂れ下がる狭スペースでこのショートロッドは力量を發揮し、漸く開花期を迎えた。

釣り仲間から珍しがられる様になったのもこの頃だった。

しかし、大物が掛るとバレ易く、ラインスピードを落とせない為、藪沢ではちょっとスタンスを間違えると藪に絡んでどうにもならなかった。

◆2週間山中放置事件◆

足羽の魚見川でこのロッドを使用し、釣り終わって釣り仲間のワンボックスに戻り、ルーフキャリアの上にロッドを置いた。

ひとときり話し込み次のポイントなる部子川に到着、8.0.3#で釣って帰り仕度をしている最中にこのロッドがないことに気がついた。

慌ててルーフキャリアを見るがある訳がない・・・釣り仲間に事情を話して帰りに魚見川によって探したが見つからない。

「安い竿やさかいエエわー!」・・・と強がりを書いて帰阪した。

そして2週間後、魚見川を目指して走る道の脇にオレンジのラインが垂れ下がっている。

「ちょおろ停めてー!」

・・・降りて走り寄ると、杉の木にこのロッドが立てかけてある。

「あったわ!・・・ないだの!」

・・・ロッドもリールも無くした時のまま、幸運にも放置された山中から舞い戻って来た。



◆そして訪れた倦怠期◆

ショートロッドとして使い方がわかり始めたものの、大物が掛るとバシ易くラインスピードが落とせず数沢では痼癢が出る。

「こうなるぞ#23のしなやかなロッドがほしくなる。」

加えて元々遊び半分の衝動買いで得た五千円の安いロッドに貴重な釣りの時間を託すことが許されなかった。

「もっと、エエ竿があるハズや!・・・硬すぎんねん、安モンやし!」
斯くして、それまでの出番を新入りの7.0.3#ロッドに明け渡すことになる。

それから、私のショートロッド模索期が始まり、グラスの#2や6.0.のカーボンや・・・と、とっかえひっかえやらかす中、辛うじて消耗品気分で使用されるのみで、もはやこのロッドの全長がえも頭の中から消え失せていた。

◆堰堤沈没事件◆

だいたい消耗品に近い扱いを受けると、進行時の不注意でロッドにダメージが及ぶ様な状況で使用されることになる。

ある時、堰堤を超えて上流に詰めようといつもの高巻きを始めたが、しんどくなつてこのロッドを口に銜えて堰堤の脇を登り始めた。

ところがこの時堰堤から降り落ちる水筋にロッドティップが触れて突っ込み、漕えなくロッドは口元を離れて堰堤の深みに沈んで行った。

もはやこれまで・・・登るのを諦めてロッドが沈んだ落ち込みを見つめ、呆然と立ち竦む間も、ロッドではなく買ったばかりのリールだけでも何とか回収できないかと考えていた。

「見えないよ!」にか立ちこんで行ける所にオレンジのカーフテールで巻

かれた#10のバンピーが水中で漂っている。

「しめたー」

・・・と思い、ゆっくりと立ち込んで毛鉤をツマミあげると結ばれたリーダーを手繰ってラインが深みから引き上がってきた。

「これで取れたー」

・・・と思った時にラインが絡まったトップガイドが浮き上がりロッドが回収された。

しかし、リールが付いていない・・・ラインの先は未だ深みの底へ続いている。

「なんで?・・・リールわいー」

それから必至でラインを手繰り寄せ、角度を変えて引っ張るもダメ・・・結局、岩に擦れてラインが切れる寸前でどうにか回収できたものの、ラインはもとより、新品のリールでさえも使う気になれない程、大きなダメージを負ってしまった。

◆ロッドとして扱われなかった疎外期◆

そうこうする内にロッドも増え、当初圧倒的な出番を誇った後輩の8.0.0.4#も古参ロッドの頭となり、これまでの実績を讃えられて後輩の出陣を見送る「殿堂入り」の存在になっていた。

その座を譲った新入りの7.0.0.3#ロッドでさえ、折れてとっくにロッド生命を終えていた。

しかし、このロッドは使う気があれば使える状態で、特にロッドとしての致命傷は負っていなかった。

ところが、コイツはもはやロッドとして扱われず、ティップは磁石がついた紐をくくられて子供の魚釣りゴッコの竿となり、バットは布が結ばれてタンスの隙間の掃除道具となっていた。

時にはプチトマトの支柱となってひと夏を過ごした屈辱も受けている。

◆ゴミ収集場所からの生還◆

折れたロッドを処分しようと束ねた紐を左手に持ち、ふと気がついて右手にこのロッドを持ってゴミ置き場に捨てて出勤した。

あるとき、玄関の傘立てから傘を抜くと、奥にこのロッドが立てかけてある。

「?・・・誰が拾って帰りよってん?・・・」

・・・家族の誰かが、私が誤って投棄したものと勘違いして、ゴミ置き場に出したこのロッドを持ち帰っていた。

しかし、この時は「まだいつか捨てればいい・・・」と、言う様な感じでそのまま傘立てに放置した。



◆どうして「リ」から「再」デビュー・再認識された成熟期◆

私のショートロッド模索期も混沌を極め、「調子」を優先するようになっても「調子」に不満が出て、「調子」を取ると「調子」が今一つ・・・結局ショートロッドとして「調子」は9.9.「素材」はカーボンと決め、夏まで何とかが見つけて間に合わせようとした。

しかし、結局見つからずにその時が来た。諦めてを関を出る時に「このロッドに目が留まり、何気なく手に積み込んだ。

「なんや・・・コイツ9.9.「やんけー・・・7.0.「くういめったと思ってたのに・・・」
そしてダメもとで使ってみると、田から鱗・・・今までの模索は何だったのか？

何とも表現しようがない「このロッドの良さ」を再認識した。

あえて表現するなら、釣り上がる時のリズムが良い。

全くストレスを感じさせずテキパキ釣り上がって行ける。

それがこのロッドの持ち味である・・・ショートロッドとしての「調子」と「硬さ」はゆるやかに漸く広がっていた。

◆そしてどうして殿堂入り・別格扱いの黄金期◆

そして今、このロッドは私にとって大切なフライロッドとして殿堂入りを果たした存在となっている。

ひと昔前に既に殿堂入りを果たした後輩の8.0.「#」とともに古参ベアの別格扱いで、破棄されることも中古市場に放り出されることもない名譽ロッドとなっている。

あれだけ悩んだショートロッドはその後、手に入れた9.9.「のカーボンに役割を譲り、ひとまず一戦を退いた。

但し、後輩の8.0.「#」はその後に引き継がれたロッドを抑えて出番を迎えることはないが、このロッドだけはその持前の「硬さ」を買われて今でも時々釣り場に連れて行かれるロッドとなっている。

このロッドに記された型名・・・

DYKOH FLYROD MODEL GF662・・・6'6" #3-4

ルアーロッドでは当時それなりにもてはやされた『大丸興業』さんの、剛鉄針金の様なロッドである。



あどがき

思い起せば、ルアーロッドにされたこと、山の中に置き去りにされたこと、堰堤に落とされたこと、子供のオモチャや掃除道具、はたまたトマトの支柱・・・そしてゴミとして一度は路傍にだされたこと・・・このロッドを握ると掛けた魚以上に色々な事が想い出される。

これも五千円と言う低額衝動買いの安物イメージが災いした結果であろうが、反省とともに教わったことも多い。

ロッドに限らず道具と言つものは一長一短が存在する。

憧れのメーカー品を手に入れば短所に目を瞑り、長所を見て喜びを感じる様子がしてならない。

逆にこのロッドの様に見下した所からスタートすれば短所だけが気になって嫌気がさし、長所を認めるつもりに行きつかない。

どうも【A】と言つものはさう言つ見方しかできない様にも思えてくる。

だからと言って、弘法大師の様に「筆を選ばず」と言つ訳にも行かず・・・行き着くところは使つてく道徳への「相性」である・・・

ところが、この「相性」と言つのも不思議なもので、自分の想いと意図せぬところにはなげなく存在し、なかなか気が付くものではないらしい。

しかし、何かの拍子にこの「相性」に気が付くと長所を活かし、短所を補つ事が自然になる。



「うなる」とブランド蘊蓄等はどうでもよく、失つと金では取り戻せない存在になっていて、寿命を感じない限り代替品を探そうとはしない。

おそらく、このロッドを手にするのがなければ、この様な事が頭で理解できる歳になっても、体感する様な域までは達しなかったであろう。

そう言う意味では、このロッドには言い表せない想い入れがある。

今、使用中のロッドに満足していない訳ではないが、似た様なロッドが気になって仕方がないと言う時・・・

振り返ると似た様なロッドが手元で眠って居ないだろうか？

もしかすると、灯台元暗しで、意外と一生付き合える「相性」抜群のロッドを眠らして居るかもしれない。

某メーカーの某シリーズが・・・とか、あのロッド・・・とか、気になって仕方なく、店先に向いて手にする前に・・・

眠らしているロッドに対して、ブランドを忘れ・・・

【長】や【調子】もこの次にして・・・
短所は差して置き長所を見極める優いで接してみる事をお勧めしたい。

針金シヨートから教わった、私の反省も込めて・・・